

全市を挙げて取り組みたい わがまちの再生と世界発信

「再生」から「篠山の時代」へ

酒井隆明・篠山市長は昨年、「『篠山の時代』に向け前進」と題する平成25年度市政執行方針を市広報に発表した際、「定住促進」「子育て

いちばんの篠山市」「魅力あふれる美しい篠山市」「農都創造」「企業振興・誘致」「観光振興」などをまちづくりの重点施策として掲げ、「篠山市の時代をつくろう」と市民に呼び掛けた。

丹波の黒豆が象徴するように、篠山市は多彩な農産物を産する農業が基幹産業のまちだ。長年にわたり培われてきた里山風景は、日本の原風景ともいわれている。同時に篠山城跡と旧城下町の町並みが美しい小京都・篠山地区、近代以前に京都へ向かう街道沿いの宿場町として栄えた市域東部の福住地区が、いずれも重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）に指定されるなど、古い歴史を物語る遺構が各所に点在している。

篠山市から大阪などの阪神間へは約1時間。深い歴史・文化と豊かな自然環境に、利便性までが備わった篠山市は、近年、田舎暮らしに憧れる人々にとって聖地の一つとまでいわれ、観光客も年々増えている。

冒頭にご紹介した重点施策は、そうした篠山市の魅力やポテンシャルを前提にしたポジティブな施政方針を表すものだが、「篠山市の時代をつくろう」とは、一体どういうことだろうか。

酒井市長によるこの市民への呼び掛けの背景には、平成19年度以来、市民や議会、職員など多方面の理解と共感を糧に全市を挙げ実施されてきた、厳しい行財政改革および再生計画の存在がある。その着実な成果の裏付けとして、さらなる引き締めへの注意喚起、明るい兆しが見えてきた篠山市の「これからの展望」への思いが、その言葉には込められている。

「私が市長に就任したのは平成19年2月で

した。直後の5月には今後の財政収支の見通しを

発表しました。今のまま推移すれば、平成23年度には財政調整基金などが底をつくこと、そうなれば予算を組むこともできなくなるという目前に迫る危機的状況を、職員にも市民の皆さんにも忌憚なく公表したのです」（酒井市長）

さらに同年7月に「篠山市再生市民会議」を設置。同年11月には市民会議から第1次答申、翌20年6月には第2次答申が市長に提出され、初年度の取り組み項目、全122の再生



さかいたかあき
酒井隆明
篠山市長

計画が平成21年早々に明らかにされた（以後、年度ごとに取り組み項目を呈示）。

酒井市長は「まさに篠山市が一番苦しいとき、財政再生のために市長になった」わけだが、市長就任以後の再生への取り組みはすべて、市長選の際のマニフェスト通りだ。そういう意味で市民も、篠山市再生への願いを酒井市長に託したのだといえる。

篠山市の財政収支悪化のそもそもの要因は、平成11年4月に実施された合併（旧多紀郡4町）により、篠山市が誕生した後のまちづくりにあった。行政関係者の間では、平成11年4月の篠山市の誕生は、平成の大合併の

先駆けとして知られる。4町が合併しての市制施行という話題もあり、当時は今後の合併を模索する全国の自治体から視察の申し込みが殺到するほど注目を集めた。

「そのような一種ブーム的な雰囲気の中、当時約4万7000人だった人口を将来的に6万人にしようというのが、合併後の篠山市の最大目標でした。そのために約200億円の合併特例債を丸々活用し、6万人規模のまちづくりを意識した、いわば身の丈以上の公共投資（施設整備）を続けたのです」（酒井市長）

その後もさまざまな紆余曲折を経ながら、



美しい里山風景は地区の市民協働で維持

第1次再生計画として行財政制度の各種改革や職員の削減および給与の見直し、施設や施設事業の見直しなどを盛り込み、並行して農業・商工業の振興、雇用の確保、人口定着と増加への努力、多角的にまちの魅力を高めるための施策などで構成される第2次再生計画とを合わせた、篠山再生計画が策定、実施されるに至った。

美しい郷土、豊かな郷土の発信

平成22年度～26年度まで続く交付税削減などにより、状況は今も厳しく、再生計画の実施も「道はまだ半ば」（酒井市長）であるものの、苦しい中にも再生は軌道に乗りつつある（実質公債比率は全国レベルではまだ悪いが少しずつ改善され、平成20年度～24年度の実績効果額は約65億4000万円に達した）。

そうした裏付けのもとに、これから「篠山市の時代をつくる」ということは、換言すれば行財政的な緊縮政策と並行して、第2次再



商人町が今も残る篠山地区の町並み



丹波篠山の代名詞・黒豆は秋の枝豆も大人気

生計画によりシフトした、端的には歳入が増えるような前向きな施策・事業を展開していくという決意にはかならない。そういうことになれば都市としての多彩な魅力、発信力が高まるともと備わっていた、篠山市の底力はいよいよ本領を発揮する期待が高まる。

冒頭にご紹介した重点的な施策の中で、とりわけ篠山市の魅力およびポテンシャルを端的に生かした施策が「魅力あふれる美しい篠山市実現」に向けた各種取り組み(発信)だ。

この施策の原動力は何と云っても、市内2カ所の重伝建地区(篠山地区・福住地区)の存在にある。重伝建地区は全国41道府県86市町村106地区が指定(平成25年12月現在)されているが、そのうち2カ所以上の指定地区を

持つまちは14市しかない。

篠山市の中心部には築城400年の篠山城跡がある。その周囲には青山氏が支配した幕藩体制時代の面影をそのまま残す武家町(西新町・南新町・東新町)と商人町(小川町・下河原町・上河原町)が面的に連続して現存し、これぞ城下町という雰囲気濃厚に漂う。さらにその周囲を美しい里山(田圃と山並み)が囲む。里山からは豊かで新鮮な食材(野菜・米・肉など)が常に供給され、丹波杜氏の伝統を受け継ぐ酒蔵や丹波焼の里があり、温泉も湧いている。

「景観法の第一人者、西村幸夫先生(東京大学先端科学技術研究センター所長)からも、『阪神間から1時間の距離にこういう風景、こういうまちが残されているのは奇跡に近い』とお褒めをいただきました」

酒井市長がそう自慢するのも当然の自然景観や町並みが、篠山市では随所に展開している。

ちなみに篠山地区の商店街の一つは青山通りの名称で親しまれている。ここが日本有数のオシャレなまちとして有名な、東京の青山通り(東京・青山の地名は篠山藩主・青山氏の上屋敷があったことから付けられた)の元祖であることは、意外に知られていない。

今回の取材では篠山地区の武家町および商人町、福住地区に残る宿場町の町並み、農村集落の町並みをじっくり見ることができたが、車で移動する国道沿いにはしばしば、田舎暮らしを誘う不動産看板が見られた。

前述したように、篠山市は田舎暮らしを夢見る人たちの間で非常に人気が高い。しかも田舎暮らしをしたいと漠然と考えるのではなく、篠山に住みたいという希望者が多いのだ。篠山市ではUターン希望者はもちろん、そうしたイターン希望者のために、政策部企画課「篠山に住もう帰ろう室」が中心となって、数々の定住化促進事業を推進している。

丹波篠山に住もう、帰ろう!

その象徴が「丹波篠山田舎暮らし案内所」(篠山市民センター内)の存在だ。丹波篠山田



集落で取り組む茅葺の葺き替え(西新町)



田舎暮らし体験イベントの様様と田舎暮らし案内所



3月恒例の篠山ABCマラソン

舎暮らし案内所には専門相談員が常駐、篠山への定住・移住に関する相談、空き家の紹介などを実施している。

民間業者の仲介で移住する人もあるものの、そうした人々はJR篠山口駅周辺に住まうケースが多い。田舎暮らし案内所では、篠山市が進める定住化促進の重点地区、豊かな自然には恵まれているけれども高齢化率の高い市域東部の中山間部を中心にあっせんしている（市全域の高齢化率29・48%、限界集落数12自治会）。

その背景にはもちろん高齢化率の高い、人口減少地区への定住化を促進したいという目

的もある。しかし、それ以上に強いのが、定住希望者には地域に溶け込んで、愛着を持って長く暮らしてもらいたいという篠山市の願いだ。小さな集落に暮らす地域の人たちにとっても、新住民として来る人たちとの相性は重大な問題だ。田舎暮らし案内所では、そうした事情も勘案しながら、定住・移住したい人の希望と、地域の要望とを粘り強く擦り合わせながら、地道なあっせん活動を行っている。定住者・移住者の確保という意味では、歩留りも当然悪い。だが長い目で見れば、そうした慎重さが、双方にとって後々の幸福につながることは容易に想像できる。

前述した重伝建地区・福祉地区も定住化促進重点地区の一つだ。その町並みを歩いていると、景観保存のための改修作業を施す様子とともに、歴史的な古民家を活用したフレンドレストランや洋菓子店などがさりげなく点在しているのが目に留まる。重伝建地区としての保存基準などをきちんと守った上で、地域が産出する肉や野菜、牛乳や卵などを活用した料理づくり、お菓子づくりなどを目指す人々、さらには丹波焼を学びたいというような人々が少しずつ、定住・移住を希望するケースが増えているのだ。

外部からの定住・移住の受け入れを進めた地域の地区協議会は田舎暮らし案内所と連携しながら、そうした人々の定住・移住への本気度をじっくり醸成してもらうための体験住宅を設置し、運営している（月額3万円）。



元気なまちには常に元気な子どもたちの声

同様のケースでは就農体験住宅や体験農園施設（滞在型農園等）なども、定住・移住重点地区に設けられ、活用されている。

各地区では田舎暮らしを体験できる各種ワークショップを市民協働で実施し、田舎暮らし希望者との交流を図り、お互いの気心が知れてからの定住・移住のための努力も地道に続けられている。

「篠山市の人口は篠山市が誕生した平成11年に比べて、3000人ほど減り、今も漸減傾向が続いています。高齢化率もそれに伴って上昇しておりますので、たくさんの方に定住・移住をしていただきたいというのが本音

です。そのための助成制度も各種取りそろえています。しかし、定住・移住者をただ単に増やすのではなく、やはり地域に根付いていただきたい。迂遠なようですが、そのためにはやはり地に足のついた手法でやるしかないと思います（酒井市長）

篠山市では行政には珍しい結婚相談所『輪（りんぐ）』を設置している。これまでに20数組が成婚、10組以上のカップルに子どもが誕生するなど、定住・移住者の獲得には非常な熱意を持って取り組んでいる。それだけに一層、目先の実績を上げることだけにとらわれず、あくまでも質を重視するその姿勢には、これが篠山再生計画の一環でもあるという事実以上に、酒井市長が就任して以降の篠山市政が醸成してきた、行政としての意志の強さを感じざるを得ない。

新たな次元に向かう篠山再生

定住・移住促進には現実問題としての雇用の場の確保、若い家族に対する子育て環境の整備は欠かせない。これについては市長による企業誘致に向けたトップセールスの実施（特に篠山市の地域特性を生かした食品関連企業へのアピール）、地域ぐるみの子育て支援事業や各種助成制度の整備や実施、人手不足で後手にまわりがちな里山整備などが地道に行われ、それぞれに実績を上げつつある。



黒豆と並ぶ名物ぼたん鍋で親しまれるイノシシのイメージキャラクター「まるいの」（丹波茶まつり）

また新たな就農希望者も多い篠山市の基幹産業・農業の振興については、「農都創造」のキヤッチフレーズのもとに6次産業化の推進や後継者育成事業などが精力的に取り組みされているが、市民協働による里山の整備とともに、篠山市の地域特性である有害獣対策も農業振興には大きな課題の一つだ。

まず里山の整備については、地区協議会を中心に森林の間伐を定期的の実施している。付随して整備された場所に田舎暮らしを楽しんでもらうための里山遊びの施設などを市民協働で設置し、伐り出された木材は集積所（木の駅）に運び込まれ、ストーブなどの燃料用



サル追い払い犬の訓練の様

にペレット化してバイオマス事業とも連動するなど、多彩な取り組みがなされている。有害獣対策については、篠山市の里山を歩いていると随所で獣害対策の柵が目につく。さらに現在、特に力を入れているのがサル避けの電気柵の設置だ。篠山市内には4群約160頭のサルが生息している。近年はこのサルによる被害が非常に増えている(野生鳥獣による農作物被害)平成24年度は約1900万円)。

「その一つの原因としては、以前から里山整備が追い付かず、サルの隠れ潜む場所が多いことや、エサになる柿の実などが手入れされないまま放置されているなどの指摘があり



間伐材を集積する木の駅

ました。それについては各地区で里山整備に力を入れていただいているので解決に向かっています。大きなネックとなっているのが、ニホンサルは希少種として保護の対象になっていることなのです(酒井市長)

鹿やイノシシは一定頭数以上に増えれば駆除できるが、サルはそれがなかなか難しい。おまけにサルは学習能力が高いため、電気柵に触れて一度驚くと、そこには二度と近づかなくなる。

さらに駆除が難しいので「山への追い払い」が重要な対策になる。そのため被害の多い地区では、以前から篠山のまちづくりでボランティア参加している神戸大学の学生たちや市民が定期的に柿の実をもちだり、サルが来た



丹波焼伝統の登り窯

ら吠えて撃退する「追い払い犬」の訓練をするなど、ユニークな取り組みがなされている。こうした一連の取り組みは全国的にも先進事例として評価されており、昨年11月末には「野生生物と社会」学会が篠山市で開催されたほどだ。

また篠山市では全市を挙げた「あいさつ運動」をシンボル事業と位置付け、ホスピタリティの醸成に努めている。さらに今後は「外国人観光客の誘致に向けた職員プロジェクト」を立ち上げ、農の都、自然・文化・歴史が融合した篠山市の魅力の世界に発信していきたい」と、酒井市長は抱負を語る。篠山再生計画は新たな次元に向かいつつある。

(取材・文 遠藤 隆/取材日平成25年12月17日)